

学内広報

2013.12.18

no.1448



チリとブラジルで行われた「知の創発」の祭典
東大フォーラム2013ダイジェスト

チリとブラジルで行われた「知の創発」の祭典

東大フォーラム 2013

ダイジェスト

2000年に始まった「東大フォーラム」(UTokyo Forum) が、満を持して南米に初上陸しました。今回、東京大学から地球の裏側へ向かったのは、約150名もの研究者・学生・職員たち。11月7～8日にチリ(カトリカ大学・チリ大学)で、11月11～12日にブラジル(サンパウロ大学)で、「知の創発」(Global Emergence of Frontier Knowledge) をテーマに繰り広げた数々のセッションの様様を、ダイジェスト写真と参加者のレポートで紹介します。



チリ会場

チリと日本の交流において抜群の存在感を誇っているアタカマ天文台関連のセッションのほか、両国共通の課題である地震研究をはじめとする理学、工学、農学生命科学及び人文社会系の研究者たちが、様々なテーマで集いました。



開会式



留学説明会



チリ同窓会設立総会



非鉄鉱業・非鉄精錬業分野におけるチリ・日本間の産学官連携ワークショップ



ALMA から広がる天文・天体物理学



C



チリと日本における巨大地震・津波と火山噴火



天文観測のための装置開発と要素技術



チリと日本：海と陸の食料



チリと日本における非在来型エネルギー資源と鉱物資源の探掘

●留学説明会

チリでは本学主催のStudy Fairを2大学で開催したほか、サンパウロとブラジリアで開催された日本学生支援機構(JASSO)主催の日本留学セミナーに大学として参加。本学の紹介やブースでの留学相談等を行い、計500名以上の参加者を得ました。

●同窓会

同窓会組織が、東大フォーラムを機にチリ・ブラジルに誕生しました。11月8日発足の「東大チリ会」と11月12日発足の「ブラジル赤門会」がそれ。卒業生の絆は世界に広がっています。

チリで建設が進むアタカマ大型ミリ波サブミリ波望遠鏡(ALMA)は、初期科学運用も開始され、天文・天体物理学とその関連分野に大きな進展をもたらすと期待されています。その近くでは、本学のminiTAO 1m望遠鏡が稼働し、TAO 6.5m望遠鏡の建設も始まりました。こうした中、本ワークショップでは、系外惑星、星形成、銀河形成、宇宙論、基礎物理定数、降着円盤、宇宙線など多岐にわたるテーマで発表と討議が行われました。チリ大学、カトリカ大学に加え、コンセプション大学、アンドレス・バジェヨ大学、ディエゴ・ポルタレス大学、バルパライソ大学等から2日間合計で50名を超える参加があり、折しも観測公募中のALMAを使った新共同研究も検討されるなど、大変に実りあるものとなりました。エクスカーションとして行われたアタカマ見学ツアーも大盛況でした。

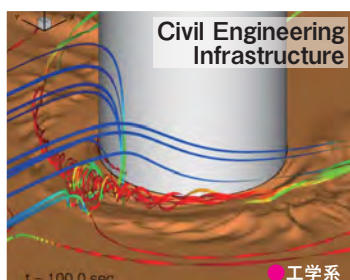
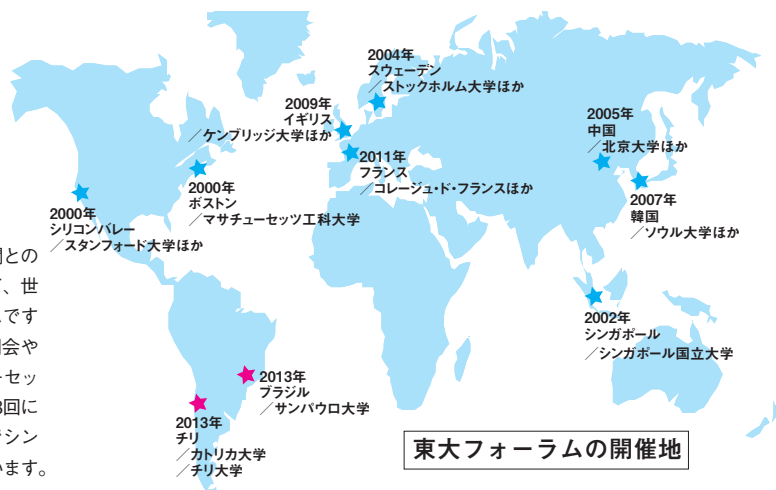
チリと日本はプレートの沈み込み帯に位置し、地震・火山噴火が多い国です。2010年チリ地震や2011年東北地震の津波は太平洋を横断し、相手国にも被害をもたらしました。これらをふまえ、11月8日はカトリカ大で、9日はチリ大でワークショップを開催しました。カトリカ大では学部生・院生を中心に150名程度が参加。チリ側3名はスペイン語で、地震研の3名は英語で研究発表し、活発な議論ができました。チリ大学では、地震センターや地球物理学科から6名が、地震研からは3名が両国での観測体制や研究について紹介しました。さらに、チリ大学構内の地震観測センター、バルパライソの津波警報センター、津波堆積物調査地、マイボ・コロラド峡谷を訪問し、チリ側研究者と今後の共同研究の可能性について議論しました。



UT Forum Tokyo

●東大フォーラムとは？

東京大学の学術研究成果を世界に広く発信し、主要大学・研究機関との国際的な研究者交流・学生交流をさらに推進することを目的として、世界各地で継続的に開催しているイベントシリーズが東大フォーラムです(2007年度までは名称が「UT Forum」)。近年は合わせて留学説明会や同窓会なども行われています。2000年1月にボストンのマサチューセッツ工科大学で行ったのを皮切りに、およそ2年に1度のペースで過去8回にわたって開催してきた知の祭典。毎回多くの研究者が海の向こうでシンポジウムやワークショップなどを行い、世界との知の交流を深めています。



東洋文化研究所は、ASNET（日本・アジアに関する教育研究ネットワーク）とともに、カトリカ大学のアジア研究センターをカウンターパートとして11月7日と8日の2日間に渡って「アジア研究の最前線」をテーマにワークショップを開催しました。東文研からは、高見澤・名和・池本の各教授と平位研究員が発表し、チリ側からは、アジア研究所のマルコス・ハラミージョ所長の他、4名が発表しました。チリは環太平洋の国として東アジアに強い関心を持っており、今後、チリにおけるアジア研究、特に東アジア研究を促進していくために、両研究所の間で協力を進めていくことになりました。

サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラムでは、博士課程学生が主体となってカトリカ大学・チリ大学とのワークショップを開催し、震災や津波に対する強靱な社会のあり方を議論しました。同プログラムが過去3年間にわたって調査してきた東日本大震災からの復興プロセスと、コンセプション大学・カトリカ大学との合同調査で明らかにしたチリ地震からの復興プロセスを題材として、両者の共通点や相違点をまとめました。この成果は国際的な学術誌に投稿される見通しです。参加者の議論は尽きず、日本でサステナビリティを学びたいという多くの声が聞かれました。



ブラジル会場

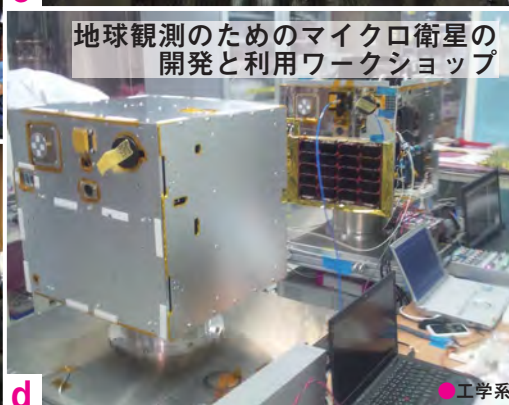
ブラジルでは、社会経済の発展に伴い、理工系人材養成のニーズが高まっており、今回は理工系のワークショップが数多く実施されました。世界最大の日系人社会を有する国という背景から、人文社会系の企画でも興味深いセッションが行われました。



開会式

日本留学セミナー
(サンパウロ)a
ブラジル同窓会設立総会b
すばる望遠鏡用主焦点超広視野
多天体分光器 (PFS) プロジェクト
総共同研究者会合c
デジタルグリッドによる次世代
電力ネットワークイノベーション

船舶海洋工学と水産業

d
地球観測のためのマイクロ衛星の
開発と利用ワークショップ学生企画：Resilient Cities
- How Cities Prepare for Possible Failures
on its System

Health



Humanities Science



Hard and Earth Sciences

ゼロエミッション社会の
ための熱流体工学研究持続可能なバイオマス資源利用
- アジアの知見と南米の知見の融合 -Biomedical and Mechatronics
Engineeringサステナブルな
都市・地域圏日本留学セミナー
(ブラジル)Workshop on Civil
Engineering Infrastructure

閉会式

ブラジルと日本は、それぞれ世界9位、同6位と広大な排他的経済水域を有し、海の恵沢を享受する海洋国家です。日本は船舶海洋工学や海底調査・探査で世界有数の技術を持ち、ブラジルは深海における石油ガス開発の経験を持ちます。今回は、従来からある日伯の協力関係のさらなる深化と、お互いの持つ強みを活かした新たな共同研究開発テーマの発掘を目的としました。1日半の期間中に日伯合わせて26件の研究発表が行われましたが、大学関係者だけではなく、ペトロbras社やトランスペトロ社などブラジルを代表する企業からの参加もあり、東大の研究成果を大いにアピールすることができました。その成果として、サンパウロ大やペルナンブコ連邦大学からブラジル企業を交えた共同研究提案があり、具体化に向けた協議を開始しました。

約50kg以下の超小型衛星における研究状況の紹介と日伯の連携の可能性を探るシンポジウムをサンパウロ大学およびブラジル宇宙庁 (AEB) で開催し、日本からは、東大が世界をリードする大学衛星やFIRSTのほどよいプロジェクトの現状、およびUNIFORM計画の概要を発表し、ブラジルからは宇宙研究所 (INPE) やAEBの活動と大学衛星の研究開発に関する発表がありました。前者は20名、後者は50名を超える政府関係者、企業、教員・研究員、学生の参加があり、UNIFORM衛星を題材にして日本が提供する衛星開発教育にブラジルサイドは強い関心を示し、今後の連携を約束しあいました。熱帯雨林をかかえ、災害も多いブラジル国土における地球観測衛星のニーズについても多くの情報収集をすることができました。

東大フォーラム 2013 実行委員会委員長に聞きました



国際本部長(副学長)

羽田 正



南米大陸初の開催となった今回の東大フォーラムについては、現地メディアでも大きく取り上げられました。上は11月10日付「エル・メルクリオ」紙(チリの大手紙)より、「濱田東大総長：今日の課題は、より創造力を持った学生を育てること」という見出しで、濱田総長のインタビューが写真入りで掲載されていました。

* 総長がプレゼントしたのはコミュニケーションセンターで好評販売中の「東京大学オフィシャルネクタイ」。購入して締めればあなたもアミーゴになれるかも！

地球の裏側で行われた「知のお見合い」

過去の東大フォーラムには、研究成果を世界に紹介するとともに、すでに交流がある国の研究者との関係をさらに深めるという目的がありました。しかし今回は事情が違い、従来あまり交流がない二国で、学術テーマを互いに出して初顔合わせをした印象。従来とは少し違う一種お見合い的なフォーラムでした。

今回組んだチリとブラジルの大学は、海外の大学とこの種のイベントを行うのが初めてに近かったそうで、実に積極的に取り組んでくれました。チリではチリ大学とカトリカ大学という2校と組みましたが、実は両校は昔からのライバル。ランチに招かれた際には「食事はこっちの方がいいだろ」などと言われましたが、「東大が中に入ってくれたから初めて組めたんだ」と言ってもらえました。幹旋業に加えて仲人もやった感触がありました。

今回の全体テーマは「知の創発」でしたが、お見合いの成果はもう出始めています。共同研究を始めるといった報告がすでに4つほどありました。こうした成果が今後どれだけ出てくるか。あとは、今回両国で開催した留学フェアの影響で留学生がどれだけ増えるか。今回の東大フォーラムが成功だったのかどうかは、それでわかると思います。1~2年後に「なんだか最近キャンパスに南米の人が増えたね」などと言われたら大成功ですね。

フォーラムが実際に始まるまでは大変でした。日本と違うと思ったのは準備に対する姿

勢です。我々はこつこつ作業を積み上げていく感じでしたが、向こうは直前に一気に仕上げるスタイル。話が進まず焦りもしましたが、最後はきちんと間に合わせてくれました。あと、我々からすると、ワークショップで行う自分の研究紹介はあくまでその後の議論の材料ですが、向こうでは議論の時間を設けずすぐコーヒブレイクになることも。共通だと思っていた研究者の「文法」も実は少し違うと実感しました。ご助力・ご協力いただいた現地大使館や関係諸機関には深く感謝しています。

交流は学術だけでなくネクタイでも!?

最後のレセプションで思い出深いのは、サンパウロの学長がなかなかお帰りにならなかったこと。それくらいノリノリだったわけで光栄でしたが、ノリのよさに少し疲れたのも事実です(笑)。実はサンパウロ大学とはスクールカラーが共通。濱田総長が学長に淡青色の揃いのネクタイ*を贈呈したら、翌日彼は早速そのタイをつけて登場してくれましたね。濱田総長がすかさず「同じだ、アミーゴ!」と言って、二人で盛り上がっていましたよ。

今回、唯一残念だったのは文系の参加が少なかったことです。先方からも「文系の研究者にも来てほしい」と言われました。挨拶をする度、「東大には文系もあります」と言わねばなりません。文系の一人としては心残りです。今後東大フォーラムをどのように展開するかは検討が必要ですが、次回は文系の先生方にも積極的に参加してほしいですね。

担当職員レポート 地球の裏側で宇宙を語る com vinho chileno

チリ・ブラジルってなにを思い浮かべますか? チリワイン、リオのカーニバル、そんなイメージが一般的でしょうか。地球の裏側ということもあり、日本からするとまだまだマイナーというのが正直なところだと思います。ほとんど真裏なので、移動時間も尋常ではありません。アメリカorヨーロッパorオーストラリア経由でざっと所要30時間~です(もちろん、片道で...)。

ここまで遠いので、観光ですら南米経験のない事務局。チリは天文関係で当地にお詳しい土居守先生(理学系研究科附属天文学教育研究センター)、ブラジルは1年前まで在ブラジルの大使館で一等書記官を務めていた井上睦子国際部長に頼りっぱ

なしでした。おかげさまで、こまごましたトラブルはありつつも、全体としては参加者の先生方に満足いただけるフォーラムに仕上がったのではないかな、と思っています。

そんな中での嬉しいハプニングを一つ。予約内容再確認のために夜中にフロントに行った帰り、ロビーで事務局メンバーと一緒に雑談していたら、ホテル併設のレストランからカプリIPMUの村山機構長(フォーラムでの基調講演をお願いしていました)がいらして「よかったら僕の部屋で飲み直しますか?」とお声がけ。すでに日付が変わる頃でしたが、その後3時間くらい宇宙のことや大学のことについて、チリワインを傾けつつ楽しく

国際企画課 小野里 拓

お話しするという貴重な機会をいただきました。「さん付け」で呼ばれる方が嬉しいということだったので、次にお会いしたときには村山「さん」とお呼びしたいと思います!



ブラジルのホテルのロビーにて、村山「さん」と記念写真! (右は筆者)

ひょうたん島通信

大槌発! 第17回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島^{ほうらい}という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

調査研究船「弥生」竣工式

北川 貴士

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター生物資源再生分野 准教授

去る11月12日、大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター所属の調査研究船「弥生」の竣工式を大槌漁港内で行いました。今年はじめて小雪がちらついていた寒い日ではありましたが、式には関係者のほか、赤浜・安渡地区をはじめ大槌町民の方々にも多数お越しいただきました。神事、餅まきも行っており、賑々しいお披露目になりました。

わたくし自身は、昨年暮れに着任いたしました。この式の準備・運営が当センターでの初の大役となりました。普段は柏キャンパス勤務ということもあり、地元の皆様への案内、漁協への挨拶、神事の依頼など大変な準備もありましたが、「ぴーちゃん」に連日、関係各所へお願いをしに出向いて頂いたおかげで、段取りよく当日を迎えることができました。

調査研究船「弥生」は、大槌湾をはじめとする三陸沿岸の海洋環境を調査研究する目的で2005年1月に竣工いたしました。が、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う大津波により、他のセンター所属の研究船とともに流失してしまいました。昨年の夏までに、地元の



新「弥生」の竣工式であいさつをする新野宏・大海研所長。背後に見えるのが「弥生」。

漁業者の協力も得て浅海域を調査する小型船外機付き研究船を3隻復旧させることができましたが、主力となる研究船の再建が待たれておりました。そのような中、関係各位のご尽力により今年6月から岩手県大船渡市の(有)須賀ケミカル産業で本船の建造が進められることになり、11月11日完成にこぎつけました。

この新しい「弥生」は、繊維強化プラスチック(FRP)製、全長13.85m、総トン数12トン、定員20名という大きさの、機動性に優れた研究船です。試験航海のあと、年内に本格的な調査を開始する予定です。

当センターでの共同利用研究、大学院の海洋実習などのほか、今年2月に完成し大槌港を母港とする(独)海洋研究開発機構の東北海洋生態系調査研究船「新青丸」(1629トン)と共に震災による東北沖の海洋生態系を調査する東北マリンサイエンス拠点形成事業にも活用される予定です。竣工式では碓川豊・大槌町長から「『弥生』は町の誇り、町の財産」というご祝辞を賜りました。本船の調査で得られた研究成果が、大槌をはじめ三陸沿岸地域の水産業復興・町おこしの後押しになるよう、センター・スタッフ一同努めてまいります。

ぴーちゃん日記

新「弥生」完成! 竣工式! その道のり

2013年11月12日は調査研究船「弥生」の竣工式でした。2年8ヶ月前、目の前で沈んで行く前「弥生」の姿が思い出され、私は嬉しさも相まって涙が止めどなく溢れ出て、今日この場に巡り合えた幸運に感謝し、同時にこの1年間、建造に関わった方々に、とりわけ沿岸センターの技術系職員の方々に感謝していました。黒沢正隆さん、平野昌明さん、鈴木貴悟さんは、前「弥生」の操船経験を生かした仕様作成に始まり、建造中は共同利用

研究に完璧に対応しつつ、合間を縫って1時間半かけて造船所へ向かい、作業状況の確認・細部への指示・業者との交渉を繰り返しながら、新「弥生」を完成させてくれました。

また、大槌町では岸壁を工事中のため、まだ船を係留する場所がない現状ですが、漁協や漁師の皆さんに何度もお願いして、竣工式当日やその後の係留場所を確保もしてくれました。

彼らのご尽力の賜物と言える新「弥生」

の完成に、ありがとうございました、の感謝の言葉しかない竣工式でした。



時速40kmで疾走する新「弥生」。前方には波が跳ねない工夫がしてある。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第8回

泉 泰行

渉外本部渉外・基金グループ企画チーム
渉外・基金課 一般職員

新年会のおつりの行方…!?

今年も残りわずかとなりました。年末年始は忘年会や新年会と、仲間内で集まる機会が多くなりますね。今回はそのような集まりの際に、「寄附」という要素を加えてみてはいかがでしょうか、というご提案です。具体的には、忘年会や新年会の「おつり」を東大基金に寄附するというものです。忘年会や新年会に限らず飲み会の会計の際、端数が出てキャッシュバックに困ることがありますよね。このような幹事さん泣かせのおつりを、皆に賛同してもらって東大基金へ寄附してはいかがでしょうか？これが「おつり+PLUS募金」です。お申し込み方法は簡単！所定の払込用紙から団体名で郵便局や銀行で振り込むだけです。頂いた寄附については東大基金HP上で報告いたしますので、参加者も皆満足すること請け合いです。

また、寄附したお金の目的も指定することができます。過去の例では、「東京大学夏季ボランティア隊第2班」の方々が、「東日本大震災救援復興支援プロジェクト」を指定しておつりを寄附していただきました。東大基金では他にも東大スポーツ振興基金や、Go Global 奨学基金、東京大学新図書館「アカデミック・コモンズ」計画など様々なプロジェクトがありますので「何を支援するか」を仲間内でワイワイ話し合っ盛り上がるのもいいのではないのでしょうか。今年の飲み会はちょっとした工夫で、他の誰かも喜ぶ形にしてみませんか？特に終わった忘年会の残金にお困りの幹事さんは是非基金事務局までお問い合わせを！

団体でワイワイといえば東大基金では仲間同士の寄附募集を支援する「グループギビング+」というサービスを始めました。詳しくは来月以降に紹介するのでは非ご期待ください。



「社会連携部永年勤続を祝う会」も寄附します！

東京大学基金事務局 教職員寄附1億円キャンペーン中！

TEL 03-5841-1217 : E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
内線21217 : URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さん いらっしやい!

第7回

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



アメリカ

アリソン・ロバーツさん

Allyson Roberts

AIKOM 生(短期交換留学)

アイダホ出身。ライブが好きでMayday ParadeやAll Time Lowのファン。カラオケならJ-Pop。特に嵐(松潤派)。

Q. どうして日本に来たんですか？



高校時代、外国語の授業で日本語を選んだのですが、先生の引率で埼玉の民家に1週間ホームステイする機会がありました。そのご家族が皆優しく、また来たいと思ったんです。「名探偵コナン」の影響も少しあるかも！?

Q. ではどうして東大を選んだんですか？

日本で一番いい大学で、私が通っていたジョーンズ・ホプキンス大学と提携していたから。埼玉の友人と会いやすいのも理由でしたね。



Q. いま学んでいるのはどんなこと？



文学や歴史などの日本文化と日本語です。アメリカの大学では生物学(神経学)を学んでいました。将来は外科医になるのが夢。TVドラマ「グレイズ・アナトミー」の影響です。

Q. 日本に来て一番印象的だったことは？

ホストファミリーと出かけた湖で見た景色は人生で一番美しいものでした。湖名は忘れましたが(笑)。白鳥型の足こぎボートや馬に初めて乗ったんですが、係の人の日本語が少しわかる瞬間があって、すごく嬉しかったです。



Q. 出身地の自慢を教えてください



出身地アイダホより大学があるボルチモアがおすすめです。名物はカニ。野球やアメフトのチームもあるし、カヤックなどの水上スポーツも盛ん。何でもやりたいことができる街です！



協力：国際センター駒場オフィス 制作：本部広報課

ワタシのオシゴト 第94回

RELAY COLUMN

医科学研究所
附属ヒトゲノム解析センター
技術専門職員

齊藤 あゆむ

機関が機能する基盤環境づくりが大切



自席では最大効率での作業を目指す

白金キャンパス(医科研)にあるヒトゲノム解析センター(HGC)で、HGCの生命科学者向けスパコンSHIROKANEに関係する多様なタスクに対処しています。

何を書けば…と思いますが、目下、継続して取り組んでいることには、ストレージ不足への対応と使用電力の削減があります。昨今のSHIROKANEは、DNAシーケンサのデータを基にした研究、診断、治療などのための解析にリソースの多くが使われています。合計3ペタバイト余のストレージがありますが、大量のシーケンスデータに逼迫し、運用での工夫や小規模なディスクの追加などでどうにかやりくりしています。一方で医科研の電力事情は厳しく、2010年からHGC一丸となって節電しています。スパコンでも、空調温度を上げる、部屋を改造する、動的な電源制御など数々の、できる限りの施策を講じ、研究力を落とさないままの限界点を模索しています。そのためユニークなスパコンになっているようです。随時見学できますのでお越しください。



HGCを背景に分野のメンバーと(右から2人目)

得意ワザ：100円ショップの物でとりあえず何とかする
自分の性格：切り取られた情報を信用しない

次回執筆者のご指名：片岡透さん

次回執筆者との関係：医科研の施設では大変お世話に！

次回執筆者の紹介：深い把握と的確な理解が頼もしい

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第97回

東京大学産学連携協議会
—産学連携を促すネットワーク

2004年4月に国立大学法人化が実施され、その中で同法人の重要な役割の一つとして位置付けられた産学連携推進の活動も、来春でちょうど10年の節目を迎えようとしています。産学連携本部としても、来し方を振り返りつつ、改めて学内外からの要請等を踏まえ、体制強化と業務のグレードアップを目指したいと思います。

今回は、産学連携を促すネットワークの仕組みである東京大学産学連携協議会についてご紹介します。

この協議会は、日本経済団体連合会(経団連)の協力を得て2005年1月に設立され、「産業界と東京大学との双方向性の産学連携推進のプラットフォームであり、産業界と東京大学とが社会に寄与する価値の創造を多様な形態で実現可能とするための重要な基盤」と位置づけられています。会員は産業界の皆様が中心ですが、昨今の地方自治体との連携増加を反映し、自治体の会員も増えつつあり、現在は750を超える企業および団体に会員として加入して頂いています。

この協議会は、産学間での対話の端緒を提供することを目的としています。まず、総長はじめ各理事が出席するアドバイザリーボードミーティングおよび年次総会を開催しています。本学の産学連携活動を紹介するとともに、産業界からはイノベーション創出等へ向けた本学への期待が寄せられ、活発な意見交換が行われます。特に昨年度はポスターセッションも同時開催し、研究者と企業の方々が熱心に交流をしました。前回にご紹介した科学技術交流フォーラムも、産学連携本部が主催する対話を生み出す「交流」の場として、この協議会の活動の一つと位置付けられていますが、これらの対話を通じて、東京大学産学コンソーシアム「ジェロントロジー」等が形作られました。

また、多様な教育研究活動が展開されている学内では日頃多くのシンポジウムが開催され、これらのイベントも産業界との対話のきっかけとして有用な場合が少なくありません。本協議会の会員には、月2回定期便「UCRホットライン」として、イベント情報を電子メールにて提供していますが、「情報収集や接点構築の観点から、どのようなイベントが開催されるのかの通知は非常に役に立ちます」との声も頂いています。

産業界への関心を高めたいイベント、産業界からの参加も歓迎するイベントがありましたら、是非ご連絡下さい。頂戴した情報は産学連携本部のホームページ上に掲載し、UCRホットラインにてご案内いたします。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第77回 バイブル

総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

石浦 章一

面白いことは無数にあるのだろうか？

「何か面白いことない？」というのが自分でも口癖になっていた。言われた人は困っていたに違いない。最近、この言葉が自分の口から出てこないことに気づいてしまった。人間は、本当に忙しいと余計なことを考える暇もなくなる、というのが実感である。忙しいのか、情報処理にかかる時間が老化と共に上昇したのかは定かではないが、本を読む速さは数年前と同じだから、そう急に頭が悪くなったはずはない。とすれば、今年出した論文の数が例年よりも少ないので、多分、研究以外に取られる時間が多くなったのだろう。自分の時間が少ないと、興味の幅が狭くなる。電車の中で読む本も、専門に近いものになりがちだ。これではいけない。

自分のことを棚に上げて申し訳ないが、興味の幅が狭くなるのが学生さんたちと科学コミュニケーションが成り立たない1番の理由である、と最近思うようになった。彼らは、授業中でも、自分に興味がないことに対してほとんど注意を払わない。教室でなかなか議論にならないのは、そもそも「共通の関心」というものが成立しないからである。その原因の一端は、余裕を持って授業できない私にあるのかもしれない。

例を挙げると、遺伝子組換え食品は怖い、というのが一般の人の考え方である。なぜ怖い説明ができないが、食べて安心だという科学的証拠もないので嫌だ、というのが多数派の意見である。組換え植物を作っている会社が儲けているとか、組換えでないことをブランドにしたい、という確信犯的な人はほんの少数で、大多数は自分の健康にメリットのない（そもそも関心のない）「パッシング対象」を叩く快感に酔っているようである。賛成、反対両派が議論しても、学生さんに議論させるロールプレイを行っても、統一見解を持っていくプロセスが、なかなか築けない。それは、個々の関心のありかが違うせいであろう。

私は教師として、クラスに入った途端に学生と同じ目線に立ち、これ面白いよね、と自分の専門を紹介したい。面白さが伝わらなくなった日が引退と決めている。その日が、極限値に収束するようにだんだん近づいているのがわかるのが怖い。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・復興支援室 より

第31回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(11月～1月)

11月～12月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア
11月～12月	福島県相馬市「寺子屋・相馬育英館」学習支援ボランティア
1月30日	第20回救援・復興支援室会議

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

本年度上半期社会現象にまでなったドラマ「あまちゃん」。そのロケ地となった、日本最北端の海女さん「北限の海女」がいる岩手県久慈市宇部町の小袖海岸は、鉄道は通っておらず、市中心部から車で30分ほどかけて、途中からは海沿いのすれ違いも困難な狭い道路をヒヤヒヤしながら進んだ先にあります。

ドラマで話題となった、驚いた時に発する「じえ！」(標準語で該当するのは「え〜！」でしょうか)という言葉は、岩手県内では「じゃ！」と言うところが多く(若い人はあまり言いませんが…)、自家用車の使用が一般的になる以前は他の地域への行き来が困難であった、この地域のみで独自に変化した方言のようです。

この小袖海岸で海女さんの活動拠点となっていた、白亜の建物「小袖海女センター」(2010年竣工)には、「北限の海女」に関する貴重な資料が保存されていましたが、2011年3月11日の津波で全て流されてしまいました(現在は小さなプレハブ小屋を設置)。しかし、地元の方々の復興への御努力に加えドラマの効果もあって、2013年7月～8月に同地域を訪れた観光客が前年同期の23倍増となったそうです！

下の写真を撮ったのは11月上旬で、海女さんの活動は終了していましたが、まだ結構な人数の観光客が訪れていました。来夏の海女さんの活動時期(7月下旬～9月)にはブームも一段落していると思われますが、ドラマの余韻に浸り、震災の記憶を忘れないためにも、小袖海岸を訪れてみてはいかがでしょうか。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」



(左)「津波襲来の碑」(奥の更地部分に以前建物あり)

(右)現「小袖海女センター」(左下にある入江で活動)

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

内線：21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとして簡単にご紹介します。それぞれの記事の詳細は、全学ホームページよりご覧ください。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
11月18日	本部学生支援課	第 37 回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が開催されました	11月3日
11月20日	低温センター	平成 25 年度低温センター安全講習会（第三回・第四回）開催	10月23日、11月15日
11月20日	本部国際企画課	チリ・カトリカ大学 サンチェス学長が来学	10月30日
11月21日	大学院教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生修学旅行	10月30日
11月21日	産学連携本部	平成 25 年度東京大学地域振興研究会が開催されました	10月28日
11月21日	産学連携本部	第 14 回ビジネスフェア from TAMA が開催されました	11月7日
11月22日	本部国際企画課	東大フォーラム（UTokyo Forum）2013 をチリ・ブラジルで開催	11月7日～12日
11月22日	カブリ数物連携宇宙研究機構	山本一太科学技術政策担当大臣がカブリ数物連携宇宙研究機構を視察	11月20日
11月25日	医科学研究所	「第 20 回東アジアシンポジウム～22 世紀を目指した医科学を通じた国際貢献～」開催	11月6日～8日
11月26日	本部国際企画課	モンゴル・ガントムル教育科学大臣一行が来学	11月19日
11月26日	史料編纂所	史料編纂所にて第 36 回史料展覧会を開催	11月8日～9日
11月27日	大学院農学生命科学研究科・農学部	附属牧場で一般公開デー開催される	11月9日
11月27日	本部施設企画課	新図書館計画に伴う埋蔵文化財調査の遺跡見学会を実施しました	11月22日～23日
11月28日	本部留学生・外国人研究者支援課	「東京大学フェロシップ」受給者証書授与式を開催	11月18日
11月28日	本部留学生・外国人研究者支援課	「外国人留学生支援基金奨学金」受給者証書授与式を開催	11月25日
11月29日	東洋文化研究所	第 13 回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催される	10月19日
11月29日	環境安全本部	平成 25 年度 本部・部局合同防災訓練実施される	10月30日
12月2日	地震研究所	富岡文部科学大臣政務官が地震研究所を訪問	11月28日
12月5日	大学院教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会の開催	11月20日
12月5日	環境安全本部	平成 25 年度 総長安全衛生パトロール実施される	11月27日
12月11日	大学院教育学研究科・教育学部	教育学研究科附属心理教育相談室第 9 回公開講座「見えない障害とともに生きる」開催	10月27日
12月12日	大学院総合文化研究科・教養学部	第 64 回駒場祭が開催されました	11月22日～24日

(11月18日～12月12日掲載分)

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているさまざまなお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
12月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
12月6日	本部学務課	平成 25 年 11 月 1 日現在の学生数について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/1475/





CLOSE UP



来場者を公式マスコット「こまっけろ」がお出迎え

第64回駒場祭が開催されました (大学院総合文化研究科・教養学部)

11月22日(金)から24日(日)まで、東京大学駒場Ⅰキャンパスにおいて、第64回駒場祭が開催されました。今回は、1・2年生が中心となって生み出す若々しさ・エネルギーを爆発させてほしいという願いを込めた「発破」がテーマでした。開催期間中は好天に恵まれ、学生たちによる多彩な企画が立ち並び、キャンパス内は明るく賑やかな雰囲気に包まれ、

初日が平日だったにも関わらず3日間で約105,000人もの来場者が訪れました。

駒場祭委員会の本部企画である近藤誠一氏の特別講演会をはじめ、理系から文系まで幅広い分野の公開講座などが行われ、いずれも盛況となりました。また、研究室、ゼミ、サークルなどの多種多様な団体による展示型、体験型、討論会などの学術企画も大変好評でした。



CLOSE UP



ティータイムにて外国人研究者と歓談

山本一太科学技術政策担当大臣がカブリ数物連携宇宙研究機構を視察(カブリ数物連携宇宙研究機構)

山本一太科学技術政策担当大臣が11月20日(水)、本学柏キャンパスの国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構(Kavli IPMU)を視察されました。

大臣は村山斉機構長による最先端研究開発支援プログラム(FIRST) SuMIRe(すみれ, Subaru Measurement of Images and Redshifts)プロジェクトの説明、アレクシー・レオター特任助教による暗黒物質研究の説明を受けられたあと、TV会議で接続された海外の研究拠点の担当者から研究説明を受けられました。

これに先立ち、大臣は折しも大講義室で開催されていたCERN(欧州原子核研究所)ファビオラ・ジアノッティ氏によるヒッグス粒子発見に関するセミナーをご覧になり、またクリーンルームで進められているBelle II(ベルツー)実験用半導体検出器の製作状況も視察されました。

その後、藤原交流広場における研究者全員参加のティータイムに参加、多くの研究者と歓談され、外国人研究者が多く在籍する当機構で世界最先端の研究が行われていることについて、感銘を受けられたご様子でした。



CLOSE UP



企画展示室の大型史料に見入る見学者

史料編纂所にて第36回史料展覧会を開催(史料編纂所)

11月8日(金)・9日(土)の2日間、史料編纂所では第36回史料展覧会を開催しました。展覧会は原則として3年にいちど開催され、第1回は1902(明治35)年でした。今回は研究所の耐震工事後2回目の開催となり、新収史料展示、企画展示のほか、研究所紹介やプロジェクト展示のコーナーが設けられました。

企画展示は「東アジアと日本、世界と日本」と題し、古代から明治維新期までの対外関係・対外交渉に関する所蔵史料30点が陳列されま

した。平安前期の常陸(入唐八家)が請来した太元帥法に関する史料から始まり、国宝9点、重要文化財4点をふくむ鎌倉・室町・戦国・江戸時代の貴重な原本史料が並びました。今回の展示のハイライトとして、これまでほとんど公開の機会がなかった大型史料も展示されました。

当日の見学者には史料編纂所が作成した展示図録が配布され、わずか2日間の限られた時間ながら、約1300名の見学者が訪れ、史料が語る歴史の世界を楽しみました。

東大オリジナル白ワイン発売キャンペーン (本部社会連携推進課)



コミュニケーションセンターでは、白ワイン発売を記念して、2014年1月末まで本学教職員の方に、赤・白ワイン2本セットを5,000円(1本の場合2,800円)で割引販売します。12月26日(木)15時までにご注文いただければ年内にお届けします。この機会に是非一度お試しください。ご注文は、コミュニケーションセンター(内21039)まで。(ウェブサイトからの注文はできません。)

表紙について



今回の表紙は、東大フォーラム特集より、チリ・アタカマでのエクスカッションの風景です。白い建屋は本学のminiTAO 1m望遠鏡。標高5600m超の高所にあるため、参加者は酸素供給装置を装着しています。



大学院研究考

学生が博士論文を書く時期になると、研究とは人だなとつくづく思う。研究の進め方には個性が反映され、しばしば、そこには指導教官の入り込む余地はない。だからこそ、研究は面白いし、たとえ同じ研究対象を選んでも、それぞれの人で異なる発見がある。ただ、学生本人にその面白さを理解させる事はなかなか難しい。特に今は、情報の洪水に飲まれ易く、ともすれば自分の研究を過小評価しがちである。科学には競争がつきものであり、競争相手が何をやっているかという情報は確かに重要である。しかし、どこかで開催された小さな学会の抄録がインターネットで簡単に入手でき、優れた検索エンジンで何でもキーワード検索できる現在、不要な情報を取捨選択する能力、じっと我慢する能力、そして、開き直る能力は、情報収集能力以上に求められる。情報は適切に処理できて初めて情報たリエル。これが極端になると、いつの間にか

自身の研究の拠り所が己のデータではなく、他人のデータになっていたりする。

己のデータが正しい方法論に支えられたものでさえあれば、学生にはあえて関連論文を読まないように、勉強しないように論ず事がある。効果があるかないかはすぐには解らないが、すくなくとも情報の中に身をおかず、自分の目の前のデータを愛で、それを元に物事をじっくり考える事のほうが、研究をスタートしたばかりの初心者にとっては遥かに重要であるからだ。このような当たり前の研究をおこなう、まさにゆとりが、今の大学院教育の場から失われつつあるような気がしてならない。研究の現場で、学生は昔よりもタフである事が求められている。

白髭克彦
(分子細胞生物学研究所)